

動物園人、つながりを思う

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長)



私は動物園という場で動物と人と向き合う仕事に長く就かせて頂いた幸せ者だ。そんな自分を自分で勝手に動物園人と呼びながら、動物世界に人を重ね、あれこれ思いを巡らせ楽しんでいる。人の世界は難解だから、動物園人の関心事と言っても「人はやっぱり動物だよなあ」というくらいのもなのだが、動物の仕草や表情、姿形や生き方、あるいは動物の成り立ちなど様々なものを人と対比させたりして、「なるほどなあ」と自身に得心を行かせ、勝手に悦に入っている。

動物園人には人のことを語る知識も能力もないが、人が動物であるという事実、人間を「自然物」と言い表した歴史小説家の司馬遼太郎氏の言葉に勇気づけられ、人が生きる上で大切なものである「つながり」について、動物や自然史などを背景に動物園人の思いを述べたい。

「つながり」は橋がつながるとか、ネットでつながったなど、色々な場面で汎用される日本語だ。生物学的には次世代へのいのちの継代の意味で使われるが、言葉の響きには、どこか生物学的な柔らかさがあり、生き物が生きるために集まる様子を感じさせる。

人も動物も共に地球に生まれ、育まれてきた。人は自然史上、ごく最近になって登場した新参加者にすぎないが、ほんの一瞬ではあるものの動物と同じ歴史を生きたのは事実だ。人は歴史を振り返り、今を知り、未来を考え、生きる動物であるから、動物が生きた自然史とはスケールが違うが、同じ動物として自然史に何か学ぶところがあるように思う。

昨年3月の本誌コラムに「自然史にみる生き抜き戦略」を寄稿、動物は生き抜く上で「変化、挑戦、共生」の三つを大事に貫いてきたのだろうと動物園人の考えを述べた。変化には挑戦心、挑戦心には生きる力がそれぞれ必要だと。動物は生きる力を自ら発揮するが、その力を得るには他の生き物に頼らねばならないし、頼るためには他とつながり、共に生きていることが必要であることも述べた。つながり生きるのは生き物全てに共通するものだろうと。

人は、自然、社会、他者、そして自分とつながり生きてきた。人と人のつながりは原始の人の時代に始まっていたのだろう。原始の人は自分たちを包み守っていた森から出され、厳しい環境で必死に生きねばならなかった。生き抜くためには仲間とつながり、助け合うことが必要であったはずだ。情報を集め、高め合い、何よりも安心を手に入れ、生きる力をつけながら助け合う高度な社会を発展させ、人になったのだろう。動物と一線を画した理由のひとつだ。

つながりをつくり維持するのは、いつの時代も厄介で煩わしく、対立やいざこざなどが山ほどある。少しでも宥和的でありたいと人は様々な経験から多くのことを学んだにちがいない。互いを確認し合う挨拶、感情や思いを伝える豊かな表情や言葉をつくるなどの他に、相手に手を差し伸べ、助けてあげることの必要性を知り、大事に育てた。それが人を人たらしめる所以なのだろう。人が生き抜く力は人とのつながりから生まれたと言っても過言ではない。難しい現

代社会を生きる我々にも通じる。

つながりの原点がどこにあり、どう変化したのか自然史の中で探ってみると、その大元は無生物と区別する生き物の特徴でもあるいのちの継代である。気の遠くなる悠久の時間を経て、いのちは過去から現在まで連綿とつながってきた。時間軸でのつながりだ。

時間の流れは環境を変え、生き物は生きるためそれに適応させ、異なる生き方、生き物に分散した。異なる生き物が互に関係し合い、広がり、面のつながりができた。生き物どうしは直接、間接、濃く、薄く、様々な関係性でつながり、カタマリとなり生態系を構成した。それは生き物を包み込み生かす場でもある。

生態系には見えない調整力がはたらき調和を保とうとする。例えば、食う食われる関係でも抑制力や節度のようなものがはたらき、食う側だけが得することはない。

人は皆、自然界の調和の大事さを知るが、豊かさを追い求めるあまり節度を失い、自然界に大きな負荷を掛け続けてきた。つながりで作られてきた網の目は所々で破れ、そこからこぼれ落ちる物が続出している。生き物と生態系の関係は、人と社会の関係にどこか似ている。人どうしのつながりが弱まったりすると、こぼれ落ちる人だって出て来てしまう。

同じ仲間がつながり、集団をつくることもある。鱒の魚群や雁の大群のような集団だ。誰かが危険情報を察知すればいち早く逃げることができるが、こうした集団では弱った個に対し手を差し伸べることはない。

そこに画期的な進歩を見せたのが哺乳類の登場である。子にお乳を与えて育てる側とお乳をもらい育ててもらおう側、即ち親と子の双方が見えない何かで結びつき、これまでにない個と個の強いつながりが生まれた。見えない何かとは愛

着とか絆と呼ばれる不思議なものだ。動物園人はこれを心のつながりと呼びたい。

子は親にお腹が空いたとか、寒いよと求め、親はそれに応え、子を愛おしく抱きお乳を与える。そうした双方の情（こころ）が合致し、つながりが紡ぎ出されてきたのだ。これまでの自然史には登場してこなかった個と個の間にできた不思議なつながりが愛着や絆だ。

絆は哺乳類が高度に発達するほど強くなり、つながりも深まる。複雑で難しく厳しい環境を生き抜くため、自然は哺乳類の親子や個に対し、生きる力として心のつながりを与えたように思える。絆を自然史上の妙と表現したい。

親子の小集団が集まると群れができ、社会に発展するが、その維持には秩序や調和が不可欠である。そこには親子関係で培われた、思い（情）を交わす力、相手への寛容性や抑制力などが役立っていたのだろう。子をいたわる心は他者への思いやり、手助けの大元なのだろうと思う。

人はつながる社会のため、互いの心情、思いを伝え合う手段として、身振り手振り、顔や目の表情、道具である言葉をつくり発達させた。コミュニケーション力を人はとても大事にしたから知識を集積し、技術を向上させ、ついには現代の高度情報化社会にまで発展させてきた。しかし、大元にある情報交換である情（心）を報じる部分は、現代社会ではどこか埋没感が強い。氾濫する情報で人は、時に大事なものを見失う。

不安定で先の見えない混沌とした時代を生き抜くためには、人は原点を見失わず、つながりで生まれる力を改めて考えることも大事だと思う。大元にあるのは生の対話。困難な時代こそ、人はつながり生きなければならないことを歴史は教えている。人と人との間にある大事なものを人は常に意識し続けなければならない。それが人間なのであろうと動物園人は思う。